

### Ⅲ. 鹿児島（鶴丸）城跡の概要

#### 1. 鹿児島（鶴丸）城跡の指定の経緯と理由

鹿児島（鶴丸）城跡の指定の状況は、城山の一部が国指定史跡、本丸の石垣や堀及び御厩の石堀が県指定史跡である。また、国指定史跡の範囲は同時に天然記念物指定も受けている。

##### 1) 国指定史跡

###### ① 指定の経緯

告 示： 昭和6年6月3日 文部省告示第234号

分類（種別）	名 称	地 名	地 域
天然記念物 及び史跡	城山	鹿児島県鹿児島市山下町	117番、248番の4、 252番の1

指 定 基 準：（二）代表的原始林、稀有の森林植物相

二 都城跡、国郡庁跡、城跡、官公庁、戦跡、  
その他政治に関する遺跡

管 理 団 体：鹿児島市 昭和6年6月30日

###### ② 指定面積

指定区域面積：109,342㎡



図Ⅲ-1 国指定史跡範囲図

## 2) 県指定史跡

### ① 指定の経緯

#### ア. 鶴丸城跡

県公報告示： 昭和28年9月7日 鹿児島県教育委員会告示第26号

分類(種別)	名称	所在地	所有者または管理者	備考
史跡	鶴丸城跡	城山町5-1	鹿児島県	城門および城壁濠橋

管理責任者：鹿児島県歴史資料センター黎明館

#### イ. 私学校跡

県公報告示： 昭和43年3月29日 鹿児島県教育委員会告示第3号

分類(種別)	名称	所在地	所有者または管理者	備考
史跡	私学校跡石堀	山下町6-1	※鹿児島大学	鶴丸城側 16.10m 国道側 183.30m 高野山側 115.00m

管理責任者：独立行政法人 国立病院機構 鹿児島医療センター院長  
※指定時の所有者または管理者

### ② 指定面積

#### ア. 鶴丸城跡

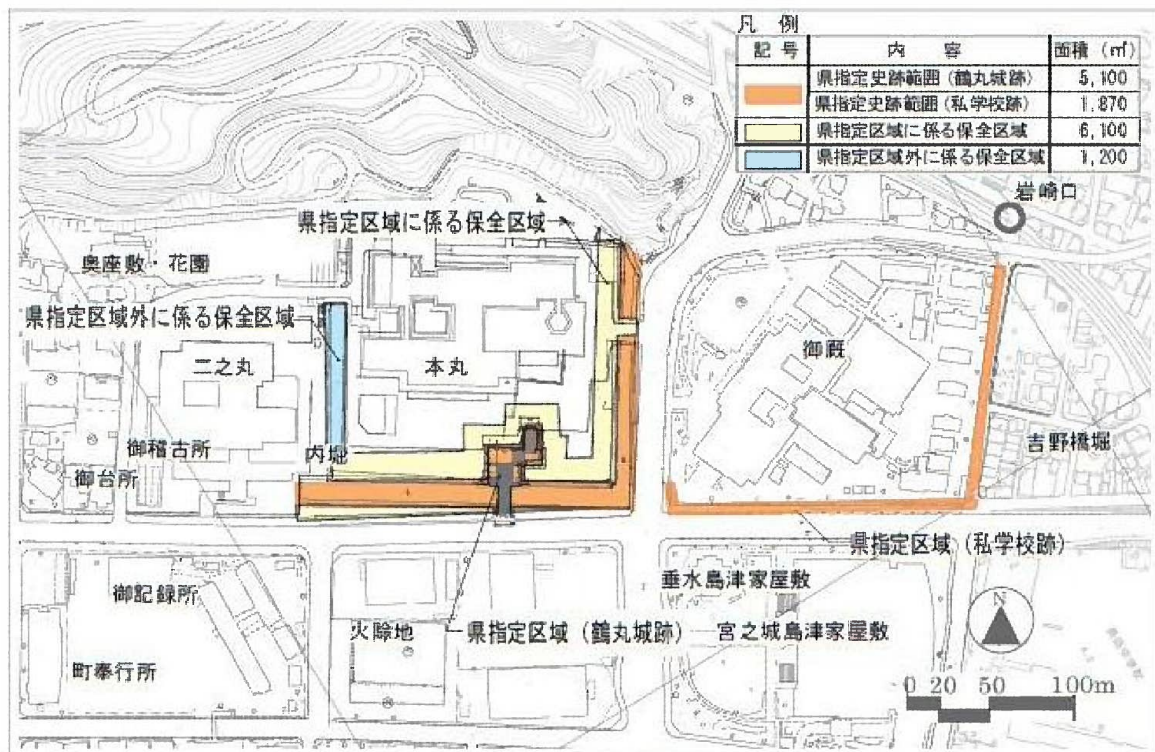
指定区域面積：5,100㎡

県指定区域に係る保全区域面積：6,100㎡

県指定区域外に係る保全区域面積：1,200㎡

#### イ. 私学校跡

指定区域面積：1,870㎡



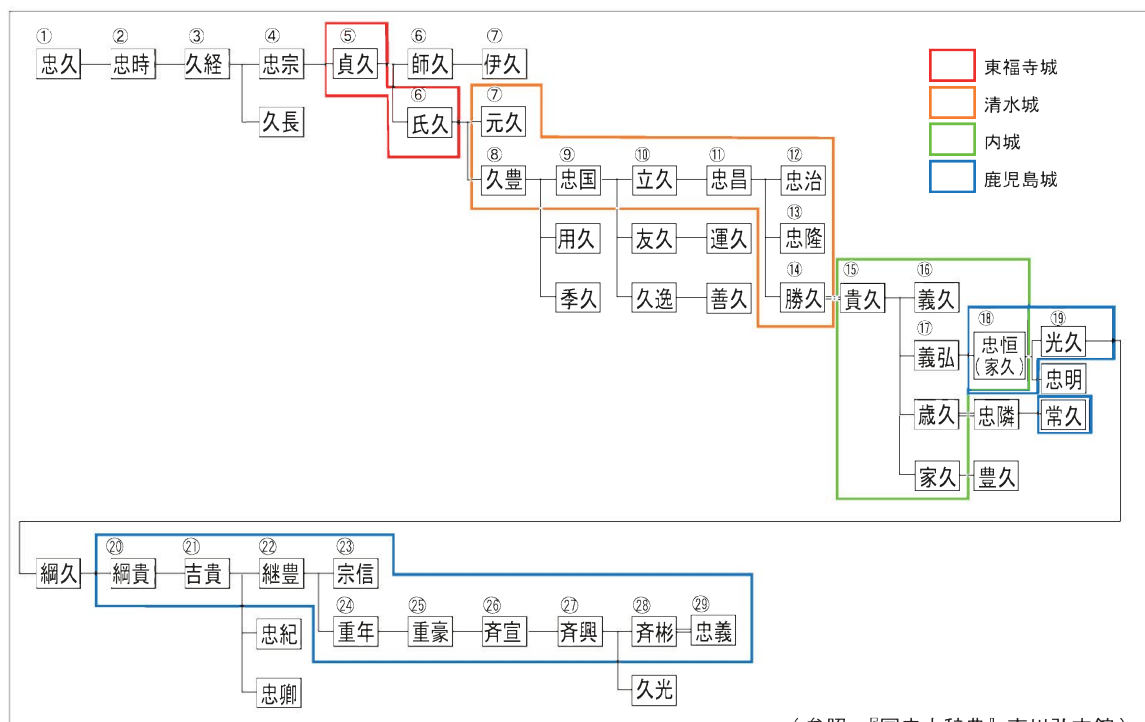
図Ⅲ-2 県指定範囲図

## 2. 鹿児島（鶴丸）城跡の歴史

### 1) 島津氏と居城の変遷

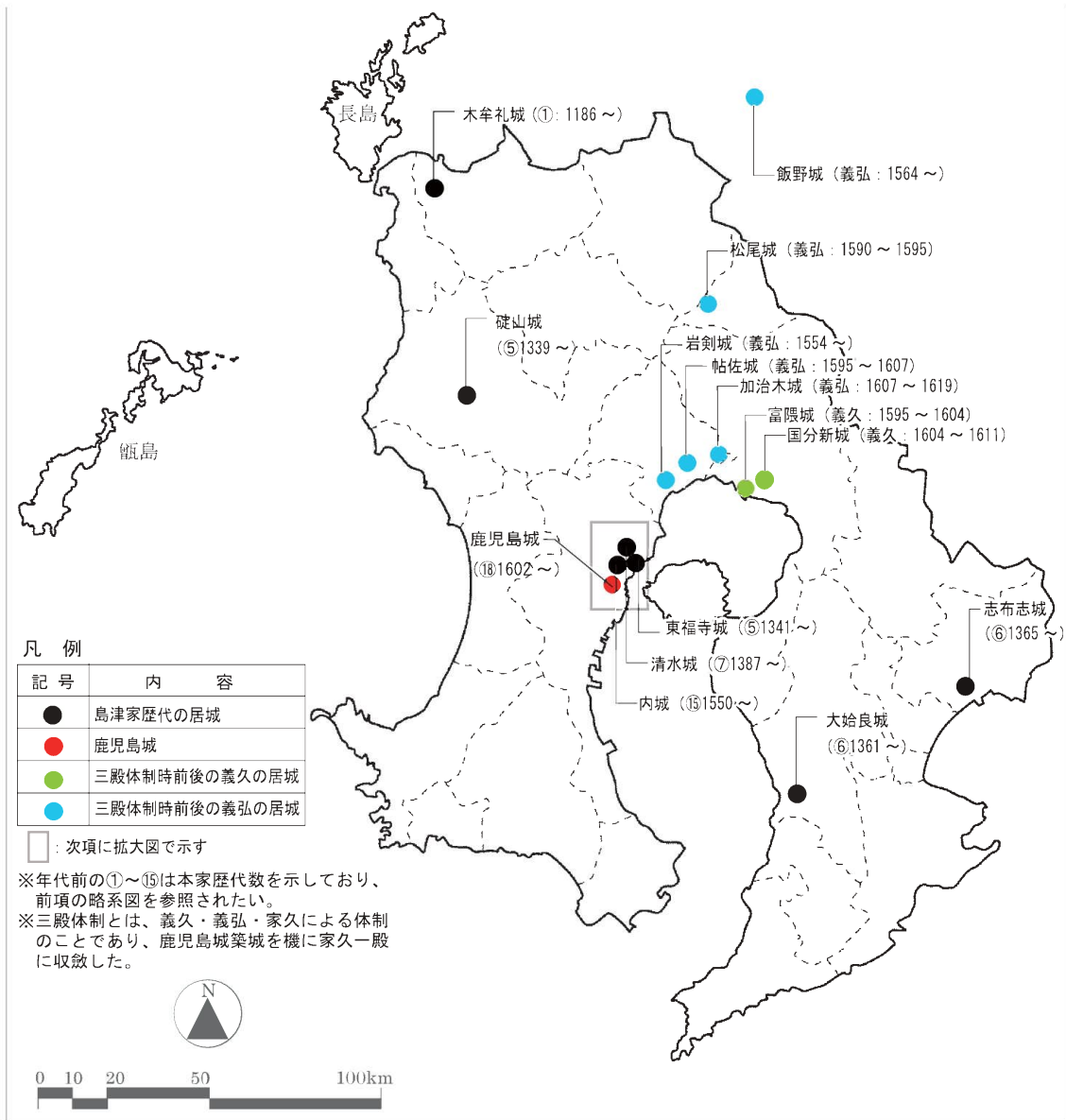
暦応4年（1341）、鹿児島郡司矢上高純の東福寺城（現在の鹿児島市清水町多賀山公園）を島津家5代貞久が降し、居城としたことで島津氏の鹿児島進出が始まった。その後の居城の変遷については、島津氏が鹿児島進出の足がかりとした東福寺城には興国4・康永2～元中4・至徳4年（1343～1387）の44年間居城した。東福寺城は南北朝期、海に面した要害の城として重要な意義を有したが、居館や城下町を形成するには狭隘であった。そこで向側の精木川（あべきがわ 稲荷川上流）を隔てた北西の丘陵に七代元久は嘉慶元年（1387）、清水城を築いた。清水城は本城とも呼ばれ、鹿児島にある東福寺城以下、島津氏歴代の居城の中で別格の城であったと思われる。清水城には元中4年・至徳4年～天文19年（1387～1550）の163年間居城した。天文4年（1535）勝久の没落後、空城となっていたが、天文19年（1550）、15代貴久が現在の鹿児島市立大龍小学校のあたりに内城を築いた。島津氏が薩摩・大隅・日向の三州統一および九州一円の制覇を目指す拠点として、交通の利便性や城下町形成に有利な地を選んだものと思われる。うちじょう 内城には天文19年～慶長7年（1550～1602）の52年間居城した。内城は一重の堀を巡らせた程度で、防衛機能に乏しく、慶長5年（1600）の関ヶ原の敗戦を機に移転問題が表面化した。そこで初代藩主忠恒（のちの家久）は、上山城（城山）及び麓に鹿児島（鶴丸）城を築いた。

島津家の略系図と居城の変遷を以下の図に示す。

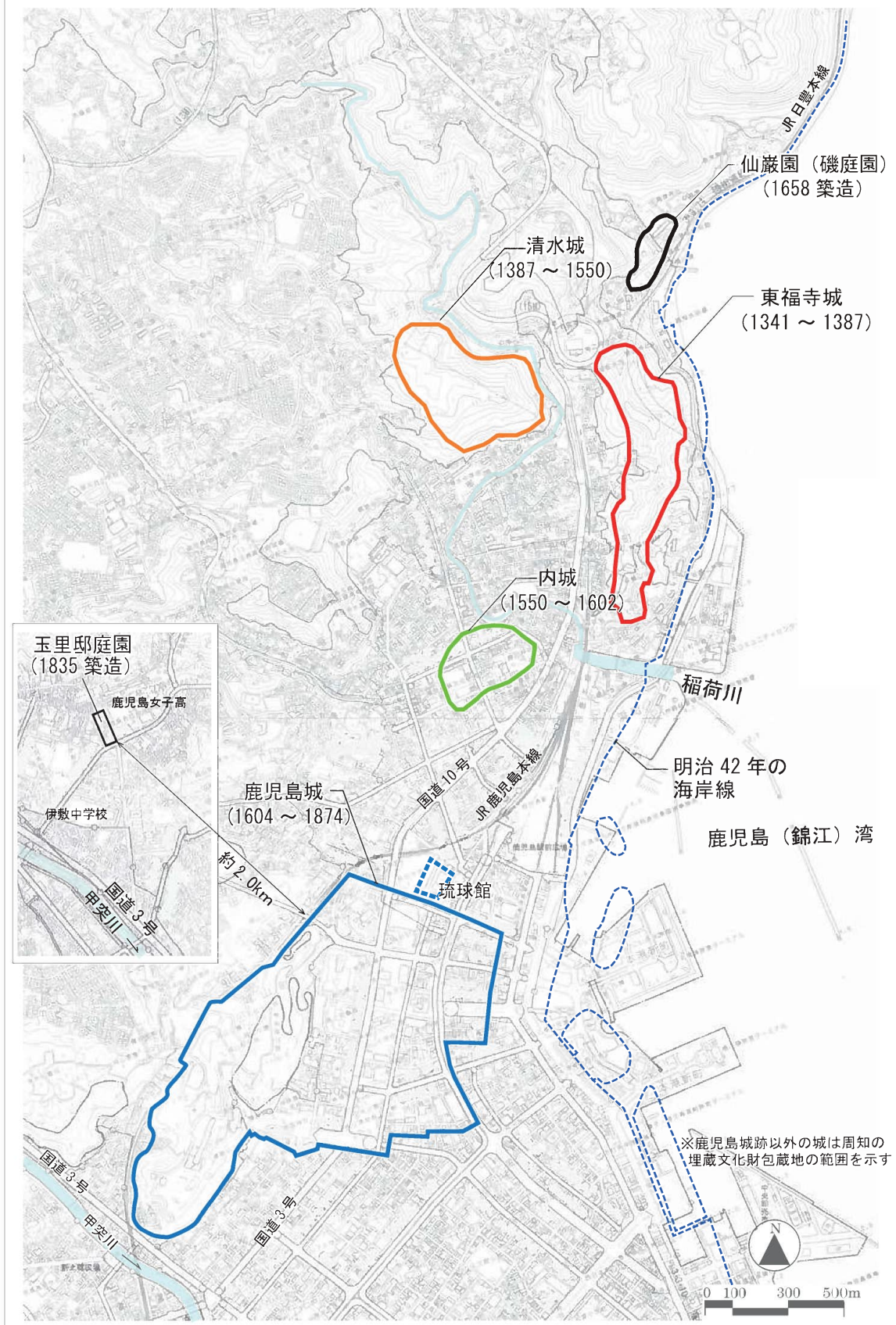


（参照：『国史大辞典』吉川弘文館）

図Ⅲ-3 島津家の略系図と居城の変遷



図Ⅲ-4 島津氏の居城変遷図



図Ⅲ-5 島津氏の居城等変遷図

## 2) 鹿児島（鶴丸）城跡の論考

鹿児島城跡については、史料等も限られ、城山と麓城の関係や、城跡の範囲、曲輪内の様子等、不明な部分も多く、県民市民にも城跡に対する共通なイメージが定まっていないのが現状である。そこで、この城の概要を示すにあたって、主に鹿児島県にゆかりが深く、一般的に知られている論文を、①築城年について、②鹿児島（鶴丸）城跡の範囲、③城山の位置づけ、④鹿児島（鶴丸）城の構成、以上4つの項目にてまとめ、比較検証を行った。さらに、現在遺存する遺構等について触れられた論文等から、⑤遺構の状況について、別視点からの論考として、⑥その他の論考、まとめとして⑦鹿児島城跡の特色、について以下に要約した。

### ①築城年について

鹿児島城の築城年月について<sup>※1)</sup>林吉彦氏は、『築城史ヨリ見タル鹿児島城』の中で、「當城の築城年月は明かでないが、島津國史に依れば慶長七年上山城の構築を始め同十一年六月島津家久が此城に遷つたことになって居る。」と記している。

<sup>※2)</sup>五味克夫氏は、鹿児島（鶴丸）城本丸跡発掘調査報告書「鹿児島城の沿革」の中で、『経兼日記』及び『見聞秘記』中の記事を紹介したうえで、「着工の年時に些少の相違はあるが、関ヶ原戦後程なく始つたとみてよいであろう。」と記している。

<sup>※3)</sup>畠中彬氏は、黎明館調査研究報告「鹿児島城について」の中で、「家久（初代藩主）は、一六〇一年より鹿児島城（鶴丸城）の構築を始めると共に、ここを軍事・政治の拠点として藩体制を整えていった。」と記している。

<sup>※4)</sup>徳永和喜氏は、黎明館調査研究報告「鹿児島（鶴丸）城築城に見る思想」の中で、「鹿児島城築城の時期については、慶長六年説と七年説の両説があり、決定づけることは困難である」としつつ、「薩摩藩の公的編纂物は鹿児島築城を慶長七年としているといえる。」と記している。

<sup>※5)</sup>三木靖氏は、鹿児島国際大学調査研報告「島津藩の本城としての鹿児島城」の中で、「家久は1602年、当時の領国内の地域行政拠点だった城を、「外城」と位置付けた枠組みを活かしつつも、家康勢と対峙する軍事的視野を優先しながら、藩政を新たに展開する新拠点としての内城の役割を念頭におきながら、新規に本城を築く覚悟で（義久、義弘の同意を得ることを優先して）、上山城に屋形を加えて新鹿児島城を建設しようとした。」と記している。

鹿児島城の築城年については、慶長6年説あるいは慶長7年説と諸説あり、史料によって異なるが、関ヶ原の戦い直後であるということはいえよう。

## ②鹿兒島（鶴丸）城跡の範囲

鹿兒島城跡の範囲について<sup>※1)</sup>林吉彦氏は、「南は名山堀から廣馬場の南にある海を以て外濠とし夫に沿ふて入来院屋敷、肝付屋敷、金藏、米藏、加治木屋敷、黒木屋敷などの石造建物があり黒木屋敷の正面には廣場を設けてあつた。西は日置屋敷、花岡屋敷、新城屋敷、伊勢殿屋敷、佐志屋敷、御春屋の石造建物の内方に俊寛堀があつた此堀は北方南泉院馬場の西側に在る壕に連なり南泉院の西南隅から左折して上の平町の喰ひ違ひみちに至る外濠となつて居つた。」としている。

<sup>※2)</sup>五味克夫氏は、「現在の鹿兒島城跡の石垣、堀等の基本線はほぼ創建当時以来のものとするべきであろう。」「当初は山上、山下に施設を構えたのであろうが、山上の城主日置島津家の常久の死、元和元年（一六一五）の一国一城令等の結果、山上には番所を置くにとどめ、専ら山下の居館の整備につとめたのであろう。その際山麓東北部に堀をめぐらした藩主の居館を、隣接して西南部に世嗣、側室等の居館を石垣をめぐらして構築、その前面、周囲に一族の屋敷、役所等を配置したものである。」としている。

<sup>※3)</sup>畠中彬氏は、「初代藩主家久は鹿兒島城（鶴丸城）の築城と共に近世城下町の整備を始め、累代の藩主がその努力を続けている。上町・下町・西田町の三町は近世城下町の中核をなしていた。鹿兒島城築城以前まで下町と呼ばれていた稻荷川河口から西へ恵比須町、車（廓）町・柳町付近一帯は築城後、中世以来の上町と双方併せて上町となり、下町は海岸埋立地域に新たに開かれることになった。」としている。さらに、海岸埋立地域を正保年間頃より徐々に広げていたことについて、軍事的機能との深い関連の可能性を指摘している。

<sup>※4)</sup>徳永和喜氏は内城と比較して、「総廻りで五倍弱となり、面積比では十五倍程度となる（但、試算は鹿兒島城の矩形を一對四とした）。」また、「鹿兒島城は内城と比較して規模が全く違う大型の居城である」。なお、鹿兒島城域は本丸・二之丸・下屋敷を含める城域を言う。」と記しており、鹿兒島城域の範囲を定義づけている。

<sup>※5)</sup>三木靖氏は全体の地形について、「現在では城山展望台を含むドン広場等の城山公園、NHKテレビ塔を含む城山観光ホテル、テレビ塔を含む城山の森・城山苑となっている範囲であった。尚その他草牟田墓地とその近隣、鹿兒島市野鳥の森とその近隣等の一部は城山曲輪の可能性があり」とし、藩政前期は、「大手は城山に通じ、居所の正門は御樓門（櫓御門）である」とし、藩政後期以降は、「鹿兒島城は屋形だけ、それどころか屋形の中でも鶴丸城と愛称のついた本丸曲輪だけが目立つようになっていった。」としている。

林吉彦氏・五味克夫氏・三木靖氏の論文では、山麓において居館の整備につとめ、その周囲には一族の屋敷や役所を配置し、城下としたと記されている。また、畠中氏・徳永氏の論文から、大規模な居城を持ちながら、さらに海岸埋立によって築地を設けるなど、城下町を広げたことがわかる。

### ③城山の位置づけ

城山の位置づけに関して林吉彦氏は、<sup>※1)</sup>「上山（現在の御城山）の麓に居館を新築して之に遷り上山には日置の領主島津常久をして守備せしめ、常久の死後は山上の守備を撤し、上山城の大手口（現在の照国神社西方登山道）搦手口（岩崎谷入口高野山の西北角）及新照院越を登り詰めた位置の三ヶ所に番所を置き衛士を配備し、これを三口番所（ミクチバンドコロ）と唱へ明治維新前迄継続せられて居つた。」としている。

<sup>※2)</sup>五味克夫氏は上山城について、「中世の山城として上山城があり、その麓に城郭、城館を設営する場合、その一体性、関連性は無視できないものであったと考えられる。」さらに、「山麓の城郭、城館の建設と密接な関係の下で修築された。」としている。

<sup>※3)</sup>畠中彬氏は、「家久は鹿児島城を構築する時、上山城（城山の展望台付近が二之丸跡）の普請も同時に行い、ここを軍事上の陣所として麓の居館と一体化して考え、一六一〇年から四年間、日置島津家の常久に守備させていた。」ことを挙げ、「旧上山城は、元和の一国一城令によって撤廃されたものの、依然として軍事的陣所の役割を留保していたのではないだろうか。」としている。

<sup>※4)</sup>徳永和喜氏は、「上之山城を出城として加えるという義久の主張に対し、家久は自らの意見を強化するために、義久の意見を付け加えた。」としている。

<sup>※5)</sup>三木靖氏は、「形成期は藩内の反乱より、家康勢による藩外からの侵攻に備えた鹿児島城だった。藩政前期は城山が鹿児島城のメインと考えられた。藩政後期、城山は番所に統制されていて、土屋敷は認められたが、城山の仕明地化は目立たなかった。」としている。

城山の位置づけに関しては、中央幕府への警戒心から造られた詰城として捉えていることがわかる。

### ④鹿児島（鶴丸）城の構成

鹿児島城の構成について林吉彦氏は、<sup>※1)</sup>「背後に上山城の御城山を負ひ山上には三口番所を置き山麓に居館を構へた築城史上武家時代の第二期に属するものである。城は本丸、二ノ丸の二郭に分ち本丸は安土桃山式の石垣を以て之を囲み東、西、南の三面は水濠を周らし二ノ丸は本丸の西に接し西南二面は高さ丈余の石垣を繞らしてある、本丸、二ノ丸共に郭内の設備は全くの居館で安土桃山式築城に見る様な戦術的設備は何もなかつたのである。」としている。

<sup>※2)</sup>五味克夫氏は、「中世の上山城を取りこんで軍事上の配慮をすると共にその山麓をも城地として、城郭、城館並びに役座、武家屋敷、波戸等の施設を整備し、領内統治の進展をはかったものといえる。」としている。

<sup>※3)</sup>畠中彬氏は鹿児島城について、「屋形造りの質素なものであったが、背後の城山をはじめ、外濠としての甲突川・前之浜一帯の埋め立て地等を包含して軍事的要害の地にあり、近世薩摩藩の行政の本府として、百有余の外城を領知していたといえる。」としている。



※4) 徳永和喜氏は、「外城制度により国境の險阻なる外城を数珠繋ぎに防備し、三州は一城山海にして濠壘を形成している。だから寧ろ安全であると外城制度を外郭防衛体制と読みとったとしている。」としている。

※5) 三木靖氏は、「屋形の本丸曲輪は、義久・義弘から提示された高石垣・水濠に3面を囲まれたものとなり、東・南側（正面）からの姿は南九州第一の規模であり、壮大なものとなった。背後には上山城が控えていて、防衛性は滅法強力な施設だった。」としている。

各研究者共に、防御のための城山及び屋形造りの居館という構成であったということ共通して述べている。その中でさらに五味克夫氏は、領内統治のために役座や波戸等の施設の整備を行ったことについて、また畠中彬氏や徳永和喜氏は、鹿児島城が亀城であること理由として外城制度による防御体制を確立したことを特徴として挙げており、また三木靖氏は、屋形の本丸曲輪の規模の大きさを特徴として記している。

この他、南側の南泉院の俊寛堀、北側の岩崎口の吉野橋堀によって城の中堀が構成されていた。

## ⑤遺構の状況について

### (城山部分)

※6) 空堀と土塁が遺存しており、東和幸氏は、『研究紀要・年報 縄文の森から第6号』の中で、「現在みられる山城部分の遺構が、上山氏によるものか家久によるものであるか断定できないものの、規模の大きさから家久によるものと考えたい。通常の中世山城にみられる土塁が高さ2m・幅4mほどであるのに対し、上之山では高さ10m・幅25mほどの土塁が400mにもわたってみられるからである。通常土塁は盛土によってつくられるのに対し、上之山の土塁は削り出してつくられていることが、現在の遊歩道の切り通し断面からわかる。土塁に囲まれた区域は、ちょうど南北に軸がみられる。」と記している。

### (本丸・二之丸・御厩・その他周辺)

遺存している遺構について触れている研究者はあまり見受けられないため、絵図や史料との比較を行った。本丸・二之丸部分については、成尾常矩による内部構成についての詳細な記録がある(図Ⅲ-6参照)。そこに示されている麒麟の間や御隅櫓は現在、基礎部分の平面表示がなされている。

さらに発掘調査によると、石垣や堀の他にも池、排水溝や雨落溝が遺存していることが確認されている。城跡内では多くの発掘調査が行われており、それについては次項3.1) 発掘調査のまとめにて詳述する。加えて近年では能舞台に連なる橋掛かりと考えられる遺構が発見され、島津氏がいかに文化や伝統を重んじていたかがうかがえる貴重な遺構として、注目されている。

## ⑥その他の論考

※7) 木島孝之氏は、『鹿兒島城の縄張り構造と島津氏権力との相関 中世城郭研究』の中で、鹿兒島城の縄張りの要因として「鹿兒島城における「方形館+詰め城」という基本的な縄張り形態は、内城の伝統性によって培われ継承された「当主の居城＝方形館+詰め城」という「型」の概念に規定された結果であると考えられる。」としている。

## ⑦鹿兒島城跡の特色

先に述べた①～⑥の項目に基づく内容において、以下の3つの観点から鹿兒島城跡の特色を整理し、以下に示す。

### (城の成り立ちと構成)

- ・鎌倉以来の守護である島津氏が重視していた山城に、屋形（居館）を加えた構成の城郭であった。
- ・山城を本城として造り、詰城としていた。

### (屋形（居館）の充実と海外交易)

- ・麓の屋形造りの居館を本丸や二之丸と称するようになり、この他に御厩、役所丸、築地等で構成していた。
- ・海に面した立地であり、交易拠点である湊や築地を整備していた。

### (日本の近代化における殖産興業と歴史痕跡)

- ・城周辺に文化的施設や人材育成施設、あるいは近代化産業施設等を整備した。
- ・鹿兒島城には西南戦争時の痕跡が遺っている。

### (引用文献)

- ※1) 林吉彦 1930 『築城史ヨリ見タル鹿兒島城』
- ※2) 五味克夫 1983 「鹿兒島城の沿革－関係資料の紹介－」『鹿兒島（鶴丸）城本丸跡』鹿兒島県埋蔵文化財発掘調査報告書 鹿兒島県教育委員会
- ※3) 畠中彬 1992 「鹿兒島城について」『黎明館調査研究報告』第6集
- ※4) 徳永和喜 2008 「鹿兒島（鶴丸）城築城にみる思想－家久の「城認識」と展開を中心に－」『黎明館調査研究報告』第21集
- ※5) 三木靖 2014 「島津藩の本城としての鹿兒島城」『鹿兒島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告』第11集
- ※6) 東和幸 2013 「鹿兒島（鶴丸）城前後の城と町づくり」研究紀要・年報『縄文の森から』第6号 鹿兒島県立埋蔵文化財センター
- ※7) 木島孝之 1995 「鹿兒島城の縄張り構造と島津氏権力の相関」『中世城郭研究』第9号 中世城郭研究会



(出典：鹿兒島県文化財発掘調査報告書 (26) 鹿兒島(鶴丸)城本丸跡)

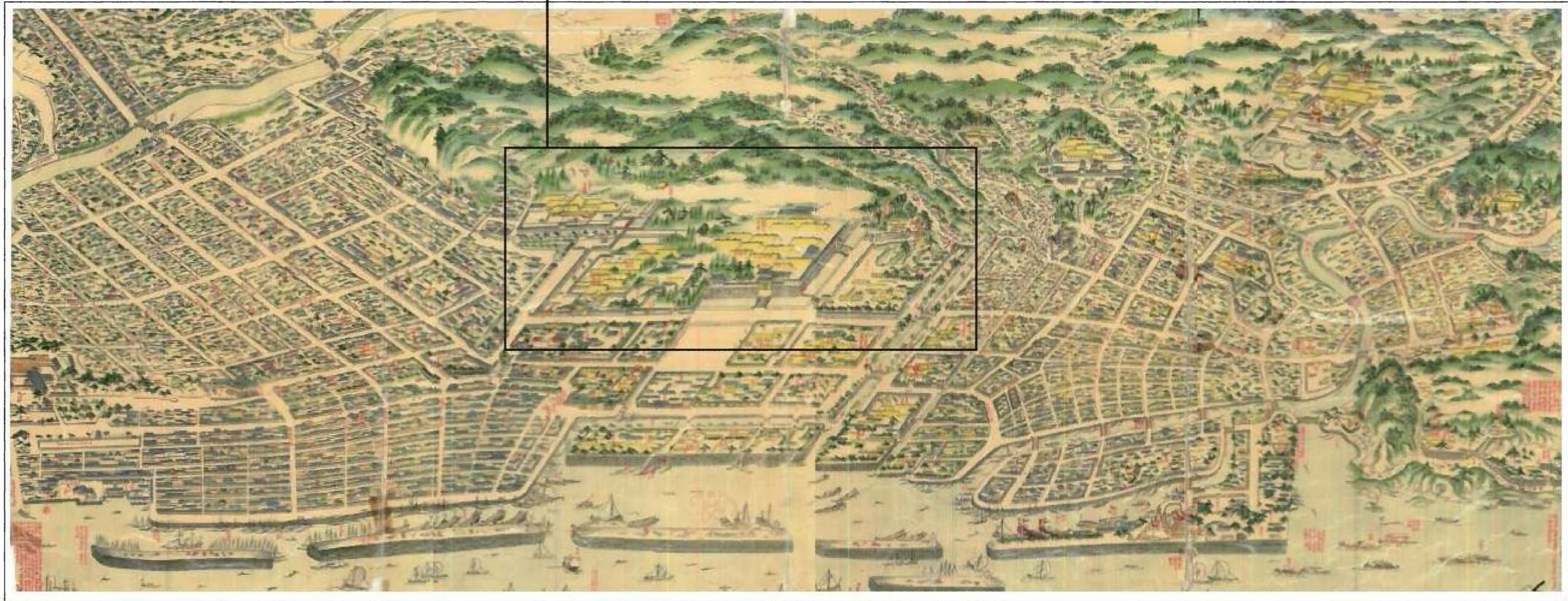
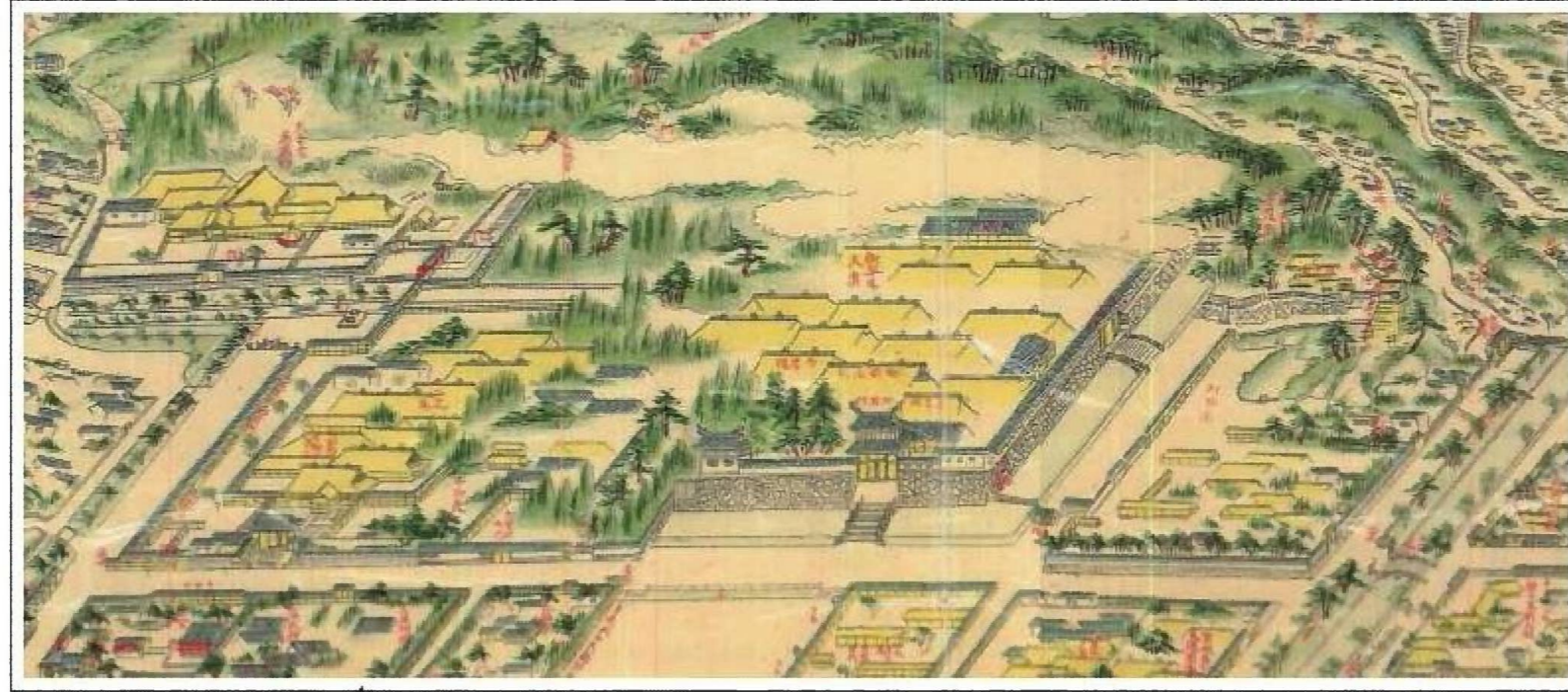
図Ⅲ-6 成尾常矩 指図

表Ⅲ-1 島津氏の居城と鹿児島城関係年表

年号（西暦）	主な出来事
文治元年（1185）	忠久、島津庄下司職に任命される。
建久7年（1196）	島津家初代忠久、木牟礼城（出水市木牟礼）に入城したと伝えられる。
暦応4年（1341）	5代貞久、鹿児島郡司矢上高純の東福寺城（鹿児島市清水町多賀山公園）を下し入城する。
嘉慶元年（1387）	7代元久、大隅国守護職を襲封して、清水城（鹿児島市稲荷町清水中学校裏山）へ入城する。（諸説有り）
天文19年（1550）	15代貴久、伊集院城（日置市伊集院町）より鹿児島に入城し、内城（鹿児島市大竜町 大龍小学校敷地内）を築造して居城とする。
慶長5年（1600）	関ヶ原の戦い。
慶長7年（1602）	初代藩主家久が鶴丸城の築城を始める。（諸説あり）
慶長11年（1606）	家久、内城から鶴丸城へ入城する。
元和元年（1615）	幕府の一国一城令により、上山城を廃止する。
慶長17年（1612）	御楼門柱立。
寛永16年（1639）	城の屋敷建替え・石垣の修補を行う。
慶安3年（1650）	大雨により鶴丸城が破損する。
元禄9年（1696）	鹿児島大火により、鹿児島城へ延焼し本丸（御楼門とも）が焼失、二之丸の一部等が焼失する。
宝永4年（1707）	本丸再建工事完了。
安永2年（1773）	造士館・演武館ができる。
宝暦9年（1759）	普請方より出火し、奉行所や材木蔵が焼失する。
天明5年（1785）	25代重豪、二之丸を整備拡大する。それまで二之丸御門と呼ばれていた門を矢来御門（現在の県立図書館正門の位置）に改める。御下屋敷門と呼ばれていた門を二之丸御門（現在の市立美術館正門の位置）と改称する。
寛政4年（1794）	二之丸の庭園を含む大工事が完了する。
文化7年（1810）	御楼門前の板橋を石橋に架け替える。
文久3年（1863）	薩英戦争。
明治2年（1869）	廃仏毀釈。
明治4年（1871）	廃藩置県。 29代忠義は本丸を去り、鎮西鎮台第2分営が入る。
明治6年（1873）	本丸、御楼門が焼失する。
明治10年（1877）	西南戦争。二之丸が焼失する。

（参考：「黎明館特別展 薩摩七十七万石 ー鹿児島城と外城ー」鹿児島県歴史資料センター黎明館 H3 一部加筆）

(拡大)



図Ⅲ-7 天保14年城下絵図

(鹿児島県立図書館所蔵)

表Ⅲ-2 鹿児島（鶴丸）城における変遷表

時代 変遷の内容	南北朝期	天文 (1532～1554)	慶長 (1596～1614)	元和 (1615～1623)	寛永 (1624～1643)	慶安 (1648～1651)	元禄 (1688～1703)	天明 (1781～1788)	明治 (1868～1911)
歴史の流れ	<ul style="list-style-type: none"> <li>このころ、上山氏が上山城に拠る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>天文8年(1539)、相州伊作家方の伊集院忠明が上山城を攻略し入城。以後、島津方の城となる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>慶長6年頃、家久が鶴丸城の築城を始める。</li> <li>藩主の居館は山下に置かれ、慶長15年、常久に御城中警護を命じ、同17年から常久が上山城に在番、同19年常久が亡くなり、以後、番所が置かれる。</li> </ul> <p>※島津常久：上山城主</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>鹿児島城は、慶長末頃に一応の完成をみる</li> </ul> <p>が、元和から寛政年にかけて増築、補修が続けられた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>寛永16年、麓の御殿が増改築され、石垣の修補も行われる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>慶安3年、大雨により城が破損する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>元禄9年、大火により城が延焼し、本丸焼失、二之丸の一部を焼く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>天明5年、25代、重豪、二之丸を整備拡大する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>明治4年、廃藩置県。</li> <li>同年、29代忠義、本丸を去る。</li> </ul>
名称の変遷	<p>～中世～ 上山城</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>城山の山上に築かれた山城で、上之山城とも称された。</li> </ul>	<p>～近世初期～ 上山城または鹿児島城（御内城）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>山城部分は上山城を含み、当初は山城部分ばかりでなく麓の平城部分も含めて上山城と呼ばれた。</li> <li>鹿児島城が近世を通じて正規の名称であったが、藩内では御内城と称された。</li> </ul>			<p>～近世中期以降～ 鹿児島城または鶴丸城</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>近世中期には山城部分を美称で鶴丸山と呼んでおり、そこから山城部分を鶴丸城と呼ぶようになった。明治になり鹿児島城全体を鶴丸城とも呼ぶようになった。</li> </ul>				
絵図等からうかがう城跡範囲と内部施設の変遷	<p>—</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>上山城の範囲はほぼ現在の城山にあたる。</li> <li>家久は上山城の曲輪をそのまま活かしながら本丸曲輪、二之丸曲輪等を整え、新居城となる山城を整備した。</li> </ul>	 <p>「元禄9年鹿児島城絵図控」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>城山の南側麓に屋形（居館）が整備され始めるが、依然として山城部分が城のメインであった。大手は城山に通じ、居館の正門は御楼門であった。</li> </ul>			 <p>7 鹿児島城（屋形）配置図</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>麓の屋形（居館）が広大なものとなり、屋形（居館）の部分が目立つようになった。なお本丸曲輪は、石垣や堀に3面を囲われたものとなり、東及び南側からの姿は南九州第一の規模であり、壮大なものであった。</li> </ul>				
主な施設	<ul style="list-style-type: none"> <li>本丸曲輪（上段・下段）</li> <li>二之丸曲輪（主郭・添曲輪）</li> <li>外曲輪（主郭・添曲輪A,B）</li> <li>空堀</li> <li>大土塁</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本丸曲輪</li> <li>二之丸曲輪</li> <li>居館（居所及び修理大夫居所） <ul style="list-style-type: none"> <li>御楼門</li> </ul> </li> <li>大手口及び新照院口、岩崎口</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>本丸曲輪（麓部分）</li> <li>二之丸曲輪（麓部分）</li> <li>御厩曲輪</li> <li>役所曲輪</li> <li>城山</li> <li>湊（築地）</li> </ul>				

参照：『鹿児島県の地名』 平凡社  
『島津藩の本城としての鹿児島城』 三木靖  
『鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告』 第11集

### 3) 外城制度

薩摩藩は、領内を113(延享元年(1744)に今和泉に設置されたのが最後で、それ以降数は一定である)の行政区画に分け、そこに武士たちを住まわせていた。これが薩摩藩独特の行政区画である外城のはじまりである。外城とは、藩主の住んだ鹿児島城に対する名である。113の区画に地頭もしくは領主を置き支配した。地頭の家筋は固定されておらず、配置替えもあり、任地に住むことはなかった。一方、私領の領主は家筋が固定されており、21の領主家があった。「一門家」(島津一門)または「一所持」と呼ばれる家格があり、一定の自立性を保ちつつ領地の運営にあっていた。

外城の主な役割は、地方行政ならびに藩主居城御内の外衛であった。中世の地頭や衆中制の流れをくんでおり、元和元年(1615)に幕府の一国一城令により、山城は破却されたが、地域の総称として外城は残った。一外城は数箇村からなり、中心となる村には武士集落である「麓」があった。麓はおおむね中世の山城近くであり、地頭仮屋を中心として石垣に囲まれた武家屋敷が整然と立ち並び、小城下を形成していた。鹿児島県や宮崎県南部の旧薩摩藩領には今でもこの麓の姿が残り、知覧や出水、入来などでは多くの人々が訪れる観光スポットとなっている。

外城の行政は仮屋で行われた。地頭たちは当初は任地に赴いていたが、寛永年間(1624~1644)以降は鹿児島城域に住むようになった。ただし、要衝である長島や甕島には地頭が赴任し続け、藩境の大きな外城には地頭代を置いたり、中抑という役職を置いた外城もあった。外城の行政の実際的な仕事は噺(郷土年寄)・組頭・横目の三役が行った。噺が外城における最高職で、複数の衆中が任命され、合議制により外城全般を統括した。その下の組頭は外城内で数組に編成された頭役にあたり外城内の教導や警備を担当し、横目は警察や訴訟、検察の役割を担った。



知覧麓武家屋敷群



出水麓武家屋敷群



入来麓武家屋敷群